

(大島郡伊仙町犬田布)

位置と環境

本遺跡は役場から北西約6km離れた伊仙町犬田布連木竿1152番地に位置する。

この付近は旧河川の河床にあたり東西に連なった高さ数mの珊瑚礁崖に南北から挟まれた長さ500m程の細長い低地であり、遺跡はその南側の崖に形成された岩陰部を中心に広がっており、約50mにわたり貝層が露出している。また岩陰部と前面の畑地との間には農道が存在するが、その脇の溝にも貝層が観察され多くの遺物が表面採集され、町歴史民俗資料館に保存・展示されている。

調査の経緯

犬田布貝塚は貝層が一部露出し、周知の遺跡として注目を集めていた。表面採集された遺物も少なくなく、重要遺跡として認められてはいたが、その性格及び範囲は不明に近い状態であった。

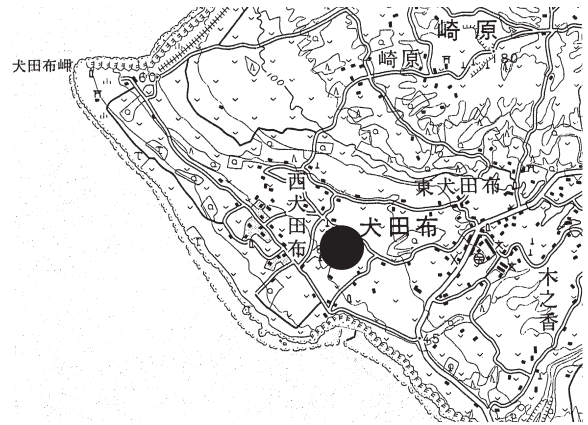
この遺跡が考古学的評価を得たのは、昭和44年12月～昭和45年1月、鹿児島短期大学附属南日本文化研究所徳之島総合学術調査団の一員として来島した白木原和美（当時、天理大学講師・元熊本大学教授）の調査であった。その後、昭和50年、小林達雄（当時文化庁技官・現國學院大学教授）が来島し遺跡を視察され、保護対策等について指導・助言がなされた。南西諸島の先史時代研究の上で、町として重要な本遺跡の取扱いについて、関係機関と協議を重ねた。その結果、町教育委員会が調査主体となり、県教育委員会の協力を得て、昭和58年10月～11月に、確認調査を実施した。

遺構と遺物

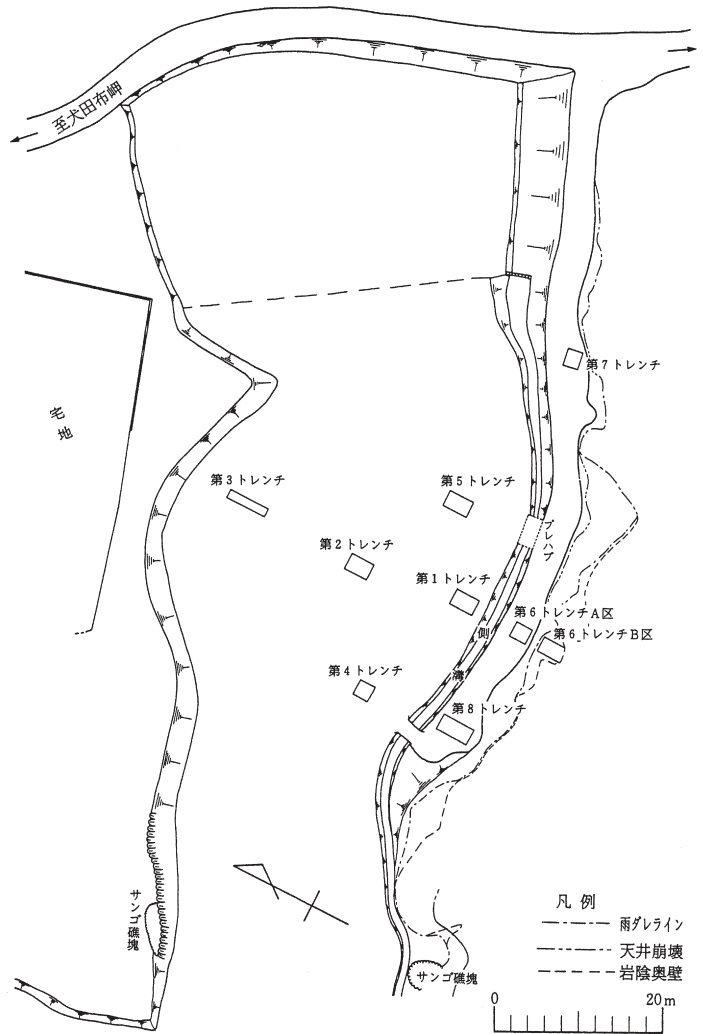
隆起珊瑚礁による岩陰の前面に位置する現サトウキビ畑に5か所のトレンチを設定し、貝層の確認に努めたが、貝層は認められなかった。その後、岩陰内に3か所のトレンチを設けて調査を実施して、陸産貝であるヤマタニシを主とした貝層を確認した。

このなかより面縄西洞式から宇宿上層式に及ぶ土器片・石器等の多くの遺物が出土した。

また、貝塚特有の貝器・骨角器等の利器及び貝・



第1図 犬田布貝塚の位置

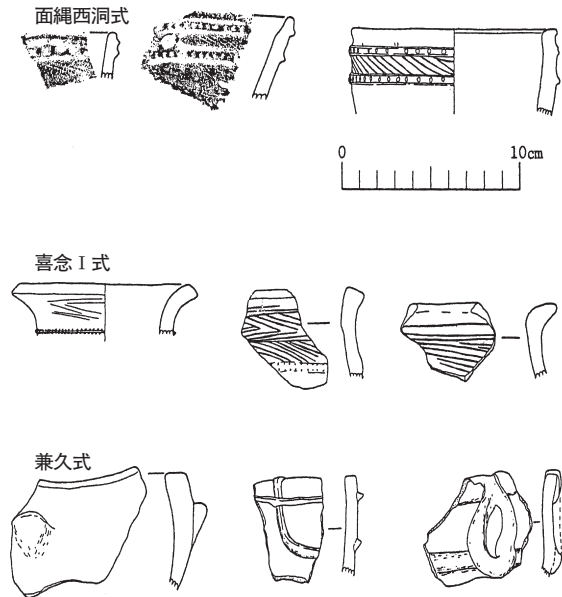


第2図 トレンチ配置図

猪牙・鹿角製の垂飾品も多く出土している。

今回の調査の結果、岩陰部及び前庭部において、保存良好な遺物包含層を確認することができ、小面積のトレンチ調査にもかかわらず多種・多様な遺物資料を得ることができた。土器については、面縄西

洞式系統（I類），琉球系の伊波・荻堂式系統（IIc類），喜念I式（IV類），宇宿上層式（V類），II類，III類は特定の型式名を付すことのできないものがあるが，器形や文様のうえからII類は面縄西洞式の系統を色濃く残し，III類は頸部の文様により喜念I式に近いもので，器形にも甕形土器，壺形土器とがみ

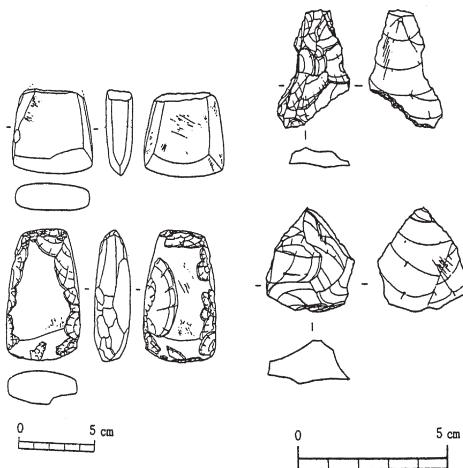


第3図 土器実測図

られる。

石器には，石斧・敲石・磨石・石皿等があり，そのなかで磨製石斧の多さは注目される。また良質のチャートの剥片は確認されたが，スクレイパーが1点認められた。しかしながら，貝器等は多く出土しており，道具のなかで小型石器の機能は貝器に求められる。

貝器には貝刃，螺蓋製貝斧，管状突起製ヘラ状利器の刺突具，螺蓋製刺突具・貝鏃等が出土した。貝

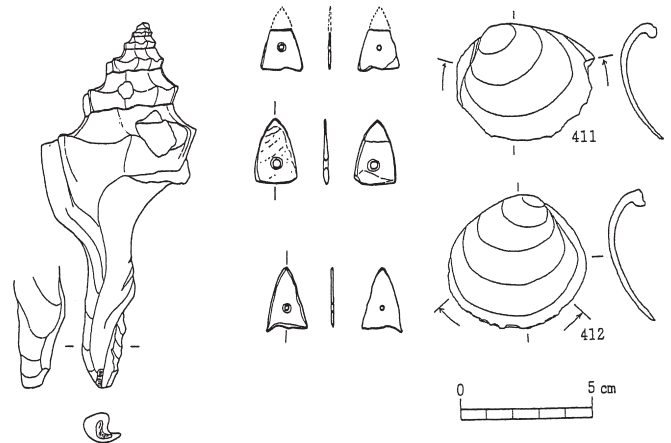


第4図 石器実測図

器は，シレナシジミを主として利用している。

シレナシジミは熱帯マングローブ地帯に生息し，現在，住用村の役勝川口一帯が唯一の生息地である。

しかし，徳之島にはマングローブ地帯がなく，現生しない。出土個数は8個と少なく，しかも道具として使用されたような形態が見られるところから，原産は大島産か沖縄産で，交易の証と考えられる



第5図 貝製刺突具・貝鏃実測図

のではないか。

貝匙等については，ヤコウガイの殻口近くの体層部を打ち欠いてつくられたものが中心である。これは，鹿児島県のみでなく，沖縄県を含めた南西諸島全域において出土するものである。

装身具には，貝輪・垂飾品・簪・耳栓等が出土した。貝輪はそのほとんどがベッコウガサガイを素材としたものが中心である。素材としては弱いものであるが，その模様がベツ甲様を呈すもので，色彩的

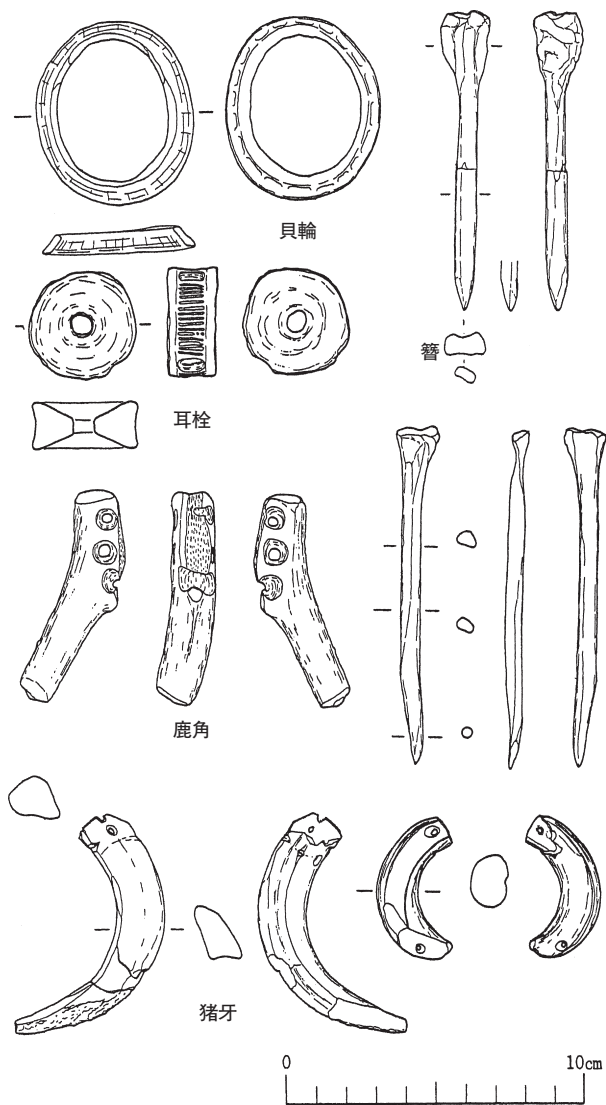


第6図 貝匙実測図

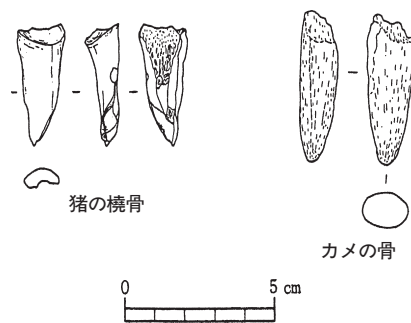
なものを考えての製作も考えられる。

垂飾品では、素材が貝・猪牙・鹿角・石等と多種にわたっている。これらの中には単独で使用したと考えられるものや、イモガイ製の貝小玉状のもののように複数で利用されたのではないかと考えられるものもある。

また、鹿角製の垂飾品が出土したことは特筆すべきものである。これまで徳之島における鹿の生息の確認はなく、また鹿をさす言葉（方言）はないとの事である。簪は、猪骨を利用したもので、やや粗製のものであり、先端が鋭利になっている。耳栓はサメの椎骨を利用した、やや大形のものである。このほか、ヤコウガイ製の釣針がある。軸部長3cm、最大幅2.1cm、先端部長2.3cm、厚さ1.5mmで、形態的には軸部が直線的で、U字形を呈し、逆棘はない。

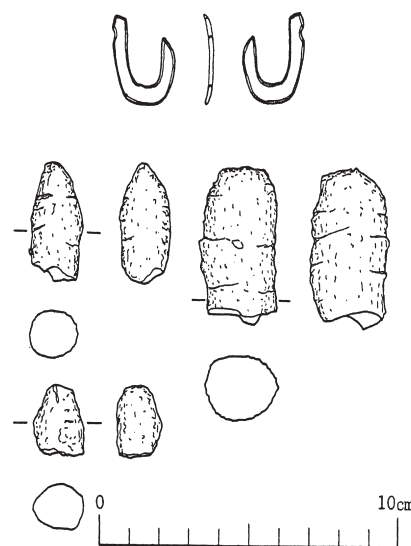


第7図 装身具実測図



第8図 骨製利器実測図

本遺跡で特異なものとして、糞石と考えられるものが3点出土している。小動物の糞の可能を含んで



第9図 糞石実測図

いるものの、分析を行なっていないため判断することはさけておきたい。

特徴

調査により、犬田布貝塚の重要性が再認識される結果となった。

平成元年3月22日に、県指定文化財の史跡として指定を受ける。

資料の所在

出土遺物は、伊仙町歴史民俗資料館に保管・展示されている。

参考文献

伊仙町教育委員会1984「犬田布貝塚」『伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書』2

(伊藤勝徳)